

JWSF

Japan Wheelchair
Seating Foundation

日本車椅子シーティング財団 財団通信 2024年 秋号

2024年11月22日 No.17

一般財団法人日本車椅子シーティング財団 〒103-0012中央区日本橋堀留町1-10-1カクタビル2F
http://www.wheelchair-seating.org/ e-mail:info@wheelchair-seating.org

Contents

1. 報告

2024年HCRグ
ローバルセミ
ナー報告

2. 寄稿

欧州シーティ
ングシンポジ
ウム
2024の参加報告

3. 報告

摂食・咀嚼・嚥
下のシーティ
ング
セミナー報告と個
人賛助会員の感想

4. 新理事の紹介

中村詩子氏
(リハビリ工学技
師／横浜リハビ
リテーションセ
ンター)

2024年HCRグローバルセミナー報告

日本車椅子シーティング財団 副代表理事 加島守

去る2024年10月2日(水曜日)～4日(金曜日)まで東京ビッグサイトにて、H.C.R.2024 第51回国際福祉機器展&フォーラムが開催されました。今回は120,041人と多くの方が来場し、昨年の第50回から国際福祉機器展だけでなく世界の福祉機器情報がわかるシンポジウムなどが行われる福祉フォーラムも開催されるようになりました。

その中で10月4日の13時～14時30分に「グローバルセミナー～高齢者ケアに活かす車いすシーティング～」というテーマでISWP（国際車椅子専門家協会）の事務局長アレックス・カマドゥ氏（南アフリカ）とプログラムマネージャクリティカ・カンダベル氏（インド）お二人に講演していただき、司会進行を筆者が担当させていただきました。

このセミナーに関する打合せは、昨年2023年10月下旬にHCR事務局長、財団木之瀬代表、加島副代表、川畑事務局長の4人でシーティングセミナー講師としてISWPの方をお願いするのが良いのではないかと話し合われ、その後HCR事務局、筆者、通訳の方と4回の打合せを行い、講義内容が話し合われました。そしてセミナー前日にはお二人の希望もあり、日本の現状を知っていただくために車椅子製造事業所として事務局長の会社であるPS-PRODUCTS株式会社、熱心にシーティングに取り組まれている花はたりリハビリテーション病院を見学していただきました。

10月2日の打合せで車椅子駆動の映像だけでなく実際に車椅子に乗ってプレゼンテーションをしたいとアレックス氏から希望があり、急遽財団の芝崎理事をお願いすることになりました。セミナーではお二人に、世界の車椅子提供状況と世界的な課題と可能性、ISWPの概要の中で特にWHOによる車椅子支給ガイドラインでは、「必要とするすべての人が適切な車椅子を利用できるように促進する」「世界的に、すべての車椅子利用者と車椅子の種類に適応させる」「個々のニーズに応じて、適切なタイミングで対応する利用者中心の車椅子サービスを提供する」ということ、推奨事項として「車椅子は、個々の評価と選択のプロセスを以て提供されなければならない、高齢者は複数の疾患を抱えているので評価と車椅子機能の必要性の検討が重要であること」、また映像を用いて「詳しい測定の方法」「トレーニング」の説明と「車椅子使用のスキル」「他者への指導」「車椅子のメンテナンスと修理」の重要性と高齢者に尊厳と敬意を払うことについてもお話いただきました。トレーニングのビデオ映像の後、芝崎理事のデモンストレーションが行われ沢山の拍手をいただきました。

講義の中で特に「**高齢者に尊厳と敬意を払う**」ということは、車椅子の選定だけに係ることではなく、高齢者・障害児者の方へのケアに対する心構えとして忘れてはならないことを改めて気づくことができたセミナーでした。



欧州シーティングシンポジウム2024（European Seating Symposium 2024）の参加報告

埼玉県産業技術総合センター 半田隆志

2024年6月19日から21日の3日間、アイルランドのダブリン市で、欧州シーティングシンポジウム2024（以下では「ESS 2024」と記載します）が開催されました。これに参加し、また基調講演待遇のパネルディスカッションを実施してきましたので、概要を報告致します。

「シーティングシンポジウム」というと、北米で開催されている国際シーティングシンポジウム（International Seating Symposium。以下では「ISS」と記載します。）が著名ですが、ESSは、ISSの欧州地域版として、ISS（および、その他の地域のシーティングシンポジウム）との密接な連携のもと、概ね隔年で開催されています。

今回のESSは、ダブリン市内の国立ダブリン大学トリニティカレッジで開催されました。このトリニティカレッジは、1592年に設立されたアイルランド最古の大学とのことで、キャンパス内の建物は荘厳でした（図1）。ESSの参加者は、このキャンパス内の学生寮に宿泊することもできるため、私も宿泊したのですが、これは貴重な経験でした。



図1 会場のトリニティ大学

ESS 2024は、全体会議（いわゆる「プレナリー」。図2）での基調講演が5件、1時間のワークショップが約50件、15分の口頭発表が約40件、ポスター発表が34件と、盛り沢山の内容でした。発表者の国籍は、約65%がヨーロッパ諸国、約30%が北米であって、欧米の方が大半を占めていましたが、その中でも日本の方の発表は3件もあり（群馬医療福祉大学の亀ヶ谷先生、東京都立大学の信太先生、東京保健医療専門職大学の杉山先生）、日本のシーティングに関連する研究の、世界における存在感の大きさを実感しました。なお、

発表者の職種については、詳細は公開されていないので不明でしたが、感覚としては、7割～8割ほどが「医療専門職」、2～3割程度が「エンジニアおよびその他」ではないかと感じました。

ESS 2024での発表内容は、ケーススタディ（例えば、Davide Dalla Costa氏とLaura Mariani氏による、Circular external fixation and sitting posture: findings from a single case studyと題した発表など）からツール開発（例えば、Ellen Van Wonterghem氏による、Markerless motion analysis as a novel tool to assess seated trunk control in dyskinetic cerebral palsyと題した発表など）まで、多岐にわたっていましたが、中でも個人的には、比較的新しい技術（3Dプリンタ、AI、ロボット等）のシーティング分野への応用に関する発表が印象に残りました。具体的には、3Dプリンタで作製したクッションの性能評価（John Tiernan氏による、Custom contoured wheelchair seating: A comparative analysis of 3D printed vs conventional foam cushionsと題した発表）や、支援機器の使用方法等の学習へのAIの活用（Juliann Bergin氏による、AI as an educational tool: How artificial intelligence can impact the educational journey of learners using assistive technologyと題した発表）、またロボット電動車椅子に関するもの（Jorge Candiotti氏による、Robotic Wheelchairs - Define, Develop and Evaluateと題した発表）等です。なお、



図2 全体会議の様子



ESSの設立者であり責任者のSimon Hall氏も、雑談した際に、「ESSでは、最新技術に関連する発表を増やしたいのだ」と述べていました。

ESS 2024では、機器展示も実施されていました(図3)。この機器展示は、例えばISSの機器展示と比較すると小規模でしたが、多様なシート調整機能を持つ高性能な電動車椅子や、アドオン電動車椅子(いわゆる簡易電動車椅子)などについて、最新の機器が展示されていました。なお、出展者は、ほぼすべてが欧米の企業でした。



図3 機器展示の様子

私は、初日の16時45分から17時45分の枠で、メイン会場にて、「Benefits for improved procurement and clinical practice derived from ISO seating standards」と題したパネルディスカッションに、パネラーの1人として参加しました(図4)。私を含め、4人のパネラー全員(他のパネラーは、イギリス人で、BESヘルスケア社創業者のBarend ter Haar氏、アメリカ人で、ROHO社(現Permobil社)のKara Kopplin氏、Bodypoint社創業者のMatthew Kosh氏)が、シーティングに関するISO規格を開発するワーキンググループのエキスパート(各国の代表者)なのですが、「私たちが開発しているISO規格を、臨床や機器開発現場で、より活用していただきたい」との思いから、このパネルディスカッションを企画しました。なお、コーディネータは、前述のSimon Hall氏、理学療法士のBart Van der Heyden氏、KU Leuven大学のElegast Monbaliu教授が担当してくださいま

した。このパネルディスカッションでは、具体的には、「車椅子上のクッションと人体との間に発生する『せん断の力』を、センサを使用して計測する際の注意点(ISO規格化検討中)」や、「座クッションについて、ISO規格に従って定量化した性能(座圧分散(臀部包み込み)性能等)の結果に基づいて、クッションを選択する手順」、そして「コンピュータシミュレーションを用いてクッションを新規開発する際の注意点(ISO規格化検討中)」などについて発表するとともに、それらに関するディスカッションを実施しました。会場からも貴重なコメントをいただくなど、有意義な時間とすることができました

(なお、このパネルディスカッションを実施したことにより、通常600ユーロの参加費が無料になり、また、限定の食事会にも参加させていただけました!)

近年は、インターネット等の発達により、自分の部屋に居ながら多くの情報を得られるようになりましたが、ESS 2024に参加して、あらためて、「最新の『生きた』知見や情報を、そのニュアンスも含めて獲得するためには、対面で学会等に参加することも重要である」と再認識しました。引き続き、ESSやISSへの参加を継続したいと考えています。



図4 ESS 2024のウェブサイトでの基調講演者紹介(左)とパネルディスカッションの様子(右。中央赤椅子が筆者)

Profile

半田隆志/2003年、東京大学大学院新領域創成科学研究科修士課程修了。同年、埼玉県産業技術総合センターに入庁、現在に至る。2011年、工学博士の学位授与(芝浦工業大学)。現在、ISO/TC173/SC1/WG11(シーティング)のコンビーナ(国際座長)。SC1/WG1(手動車椅子)、SC1/WG10(電動車椅子)、TC173/WG11(マットレス)のエキスパート(日本代表)。埼玉大学大学院連携准教授。

「摂食・咀嚼・嚥下のシーティングセミナー」 報告と個人賛助会員の感想

2024年10月26日(土)開催

今回のセミナーは、介護保険制度のシーティングの普及啓発活動の一環として開催したものです。参加の皆様も多職種で介護保険の多職種連携のイメージのセミナーとなりました。また、個人賛助会員の方から感想を頂きましたので掲載させていただきます。

参加者数78名(財団関係者を除く)の内訳は以下のようになりました。
理学療法士19名、作業療法士16名、福祉用具専門相談員13名、介護福祉士4名、歯科医師4名、言語聴覚士4名、看護師2名、柔道整復師2名、福祉用具プランナー管理指導者1名、福祉用具プランナー、管理栄養士1名、義肢装具士1名、シーティングエンジニア1名、医療機器メーカー勤務1名、他

介護保険関連施設での多職種連携の取り組みについて
作業療法士 渡辺久仁子

セミナーに参加し、「咀嚼(噛むこと)」の重要性について学べたことが大変勉強になりました。これまで、飲み込みには良姿勢が大切と認識していましたが、「噛むこと」に十分な意識を向けていなかったことに気づきました。加藤武彦先生、木之瀬隆先生のおかげで、最後まで噛んで食べることの重要性を深く理解することができました。

私は医療保険の病院で勤務していましたが、クライアントの食事における座位姿勢の評価や支援が不十分だったと感じています。今後は、この分野での支援にも積極的に取り組んでいきたいと思いました。

また、「ミールラウンド」をはじめとするチームでの取り組みにより、多職種が連携することでクライアントに様々な視点からアプローチできる重要性を実感しました。その中でも介護職がクライアントと近い存在なのでその困りごとに寄り添う姿勢や、歯科医師・歯科衛生士との連携も大切だと学びました。

さらに、車椅子やクッション、椅子、リフトを用いたシーティングが食事に与える効果についても学び、シーティングの奥深さに感銘を受けました。今回の貴重な学びを、今後の支援に役立てていきたいと思っています。ありがとうございました。



セミナーの様子



セミナー後の懇親会にて

新理事の紹介



なかむら うたこ
中村 詩子 氏
リハビリ工学技師

このたび理事を担当することになりました中村詩子です。リハビリ工学技師として、現在、横浜市総合リハビリテーションセンターに勤務して2年目、それ以前は北九州市立総合療育センターで23年間勤務していました。臨床現場でエンジニアやデザイナーとして活動し、多職種と連携しながら障害児者の生活支援に取り組んできました。

具体的には、福祉用具の個別相談や研究開発、企業との商品開発、情報発信などに携わり、「子どもの福祉用具展」の企画運営や日本リハビリテーション工学協会の講習会運営にも約20年間従事してきました。また、北欧やドイツでの福祉機器の開発現場の視察やディーラーへの海外研修も経験しています。

日本の障害児者や高齢者の車椅子シーティング技術向上のために、今、そして次世代に必要なことを、現状を踏まえながら皆様と共に考え、取り組んでまいりたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

【編集後記】

10月2~4日HCRが東京ビックサイトで開催されました。会場はのべ12万人を超える来場者でコロナ前の水準に回復しました。出展企業として参加された理事や評議員に加え、今年にはHCR評議員でもある加島副代表を中心にISWP(WHOの機関)との企画セミナーを行い満員となりました。財団として今後ともシーティングの普及に向け世界との連携を強化してまいりますので引き続きご支援賜りますようお願い申し上げます。(事務局 川畑・清水)